

香月泰男の生涯と素顔

2011年が幕を開けました。今年は、本市三隅出身の洋画家・香月泰男画伯の生誕百年を迎えます。これを機に、香月泰男美術館では様々な記念企画展の開催を予定しています。今年は、香月画伯にあらためてスポットライトが当たる年。本特集では、画伯の生涯を振り返るとともに画伯の素顔に迫ります。

■ 香月画伯の生涯

■ 幼少期〜出征まで

香月泰男は、1911年（明治44年）10月25日、旧大津郡三隅村久原（今の長門市三隅下）に生まれました。幼くして両親と離別し、一人息子の香月は祖父母によって育てられました。

香月は幼少時から将来は画家になることを心に決めていたことから、クレヨンや水彩絵の具に親しみ、そして油絵にも興味を持ちます。しかし、油絵を描く道具は高価で簡単に手に入れることができません。そこで、旧制大津中学校在学中に、津

和野に住んでいた生母に宛てて手紙を書き、油絵の道具を買ってもらうことにしたのです。そうして母親から贈られてきた絵の具箱を、画伯は生涯大切にしました。

中学校卒業後は、2年浪人の後東京美術学校（今の東京藝術大学）西洋画科に入學します。在学中から、画家・梅原龍三郎の主宰する「国画会」に出品を始め、1934年（昭和9年）に『雪降りの山陰風景』で初入選を果たします（※下写真）。卒業後は、北海道の中学校に1年半ほど勤めた後山口県に帰り、下関市の旧下関高等女学校（今の山口県立下関南高等学校）に美術教師として



▲香月画伯のアトリエ（再現）

勤務しました。

1939年（昭和14年）には、『兎』で第3回文部省美術展覧会の特選を受賞し、その前年に結婚した婦美子夫人との間に子どもも誕生します。画伯は家庭を持ち父親となり、また画家としても順調な道のりを歩み始め、創作活動への意欲を燃やしていたのです。

■ 出征〜シベリア抑留

しかし、時代は戦争の真只中でありました。香月にも召集令状が届き、1943年（昭和18年）4月に下関から朝鮮半島に渡ります。駐屯先は、旧満州のソ連との国境に近いハイラルという街で、母から贈られた絵の具箱を携えていました。配属先は兵舎などの修繕を行う係で、任

務の間には油絵を描くこともあったようです。

また、香月はハイラルに滞在する間、頻りに軍事郵便はがき（ハイラル通信）を家族に送りました。361通に及ぶ便りの内容は、軍隊での近況を伝えるものから、日本に残る家族の生活や子どもたちの成長を気遣うものなどで、そのほとんどに絵が添えられていました。家族を想う気持ちと、自らが画家であるということとを忘れない、強い意志とが生み出させたものだったと言えるでしょう。

1945年（昭和20年）の敗戦後、香月を含む多くの日本兵が捕虜としてシベリアへ抑留されました。収容所では、燃料に用いる木材の伐採などの労役を課されます。冬季には気

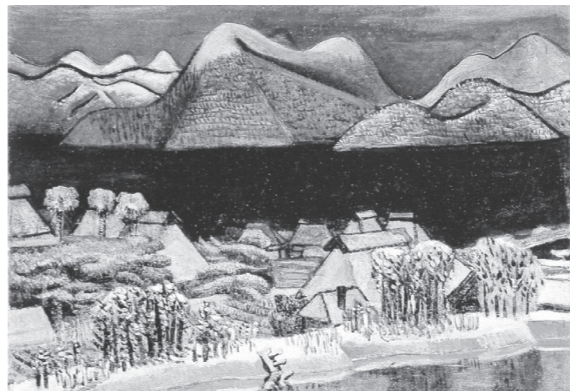
温がマイナス30度を下回る日もあり、十分な食糧もないなかで、過労と栄養失調により多くの兵士が命を落としました。この収容所での日々や亡くなった仲間の顔は画伯の記憶に強く残り、後年『シベリヤ・シリーズ』のモチーフとして昇華されていきます。

シベリアでも香月には絵を描く機会がありました。収容所に入るときに、生母から贈られた絵の具箱は取り上げられていましたが、後に返され、ソ連兵の肖像画などを制作したということとです。また、心に留めた題材を絵の具箱の蓋に漢字で、12文字書き付けておきました。これらは実際に復員後、油彩作品のモチーフとなつていきます。

そして1947年（昭和22年）の4月、ようやく帰国が決定します。シベリア鉄道で日本海に面したナホト力まで移動し、引揚船「恵山丸」に乗り京都府の舞鶴へ入港します。列車を乗り継ぎ、三隅の実家に帰還したのは5月24日のことでした。

■ 帰国後〜晩年

帰国後間もなく、香月は下関高等女学校に復職し、翌年長門市の旧深川高等女学校に転動します。1949年（昭和24年）に同校は画伯の母校大津中学校と合併し、大津



雪降りの山陰風景



画伯が使っていた絵の具箱

高等学校となります。香月は学校での授業のかたわら、精力的に作品を制作しました。『シベリヤ・シリーズ』関係の作品は復員後間もない時期に2点発表されましたが、その後はしばらく制作が中断します。画伯は以前からの作風では、シベリアでの体験を真に描くことができないと感じていたようです。

香月は、ふるさとを離れることなく制作を続けていたのですが、画伯の「父親」とも称される画商・福島繁太郎氏の強い勧めもあり、1956年（昭和31年）秋から半年間に及ぶヨーロッパ旅行に出発します。フランス、スペイン、イタリア等を巡る中で、画伯は中世の彫刻や



香月泰男画伯



香月婦美子さん

主人が、生まれ育ちそして生涯離れることなかったこの三隅は、山口県の日本海側の小さな町です。家の前には三隅川が流れ、川を横切つて山陰本線が走っています。そして裏には日本海からの北風をさえぎるように小さな久原山が丘陵のように横たわっています。主人が昭和49年3月8日に62歳で亡くなりましてからずいぶん経ちますが、主人が愛し、そして描いた三隅の景色は、今もあまり変わりはないようです。庭

香月の思い出

香月婦美子さん

の真ん中には、主人がシベリヤの収容所から豆を持ち帰って育てたサン・ジュアンの木があります。月日が経って、その木は屋根をはるかに越えた大きな木になりました。主人は生前言っていました。「自分が死んだら分骨して、サン・ジュアンの木の下に埋めてくれ。そしてサン・ジュアンの木に生まれ変わったら、孫たちがよじ登ってくれるだろう」。主人はこの木をとて大事にしていました。家にいるときはほとんど、アトリエにいて、一日中絵を描いたり本を読んだりしていました。晩年は心臓が弱っているにもかかわらず「じつじつ」と思うくらい、主人はしょっちゅう木に登っていました。主人が冗談で言っていたのは、「骨は庭全体にばらまけ、そして雨が降ったら幽霊になって出てきてやる」。香月家代々のお墓は、家の前の川沿いの土手を歩いてすぐの見晴らしのいい高台にあります。あるとき主人とお墓の話をしましたとき

に言っていました。「あつちは遠いから寂しい。だから庭にお墓。そうしたらお前たちを見守ってやれるから」。晩年、主人はたいがい朝のNHKのドラマのころに起き出して来て、母と私の三人でテレビを見ながら一緒に朝ご飯を食べていました。亡くなる冬、どうしても主人が起きて来ないんです。主人は私に心配をかけたまじと、あまり具合が悪いとは言いませんでしたけれど、今思えばこのころ起きるのも難儀だったのでしょう。「テレビが始まるから早く起きてちょうだい」と、私が言いましたら布団の中から主人が答えました。「朝の光がサン・ジュアンの木の葉を通して入るのは、何ともいえないくらいに美しいぞ。ちょっとお前も来て見てごらんな」。私も立っただけでは見えませんが、主人のわきに横になって見ました。たいしてきれいでもないな、と思いましたが、主人が「黄金の光が、美しいだろう」と、本当に感心したように言うので、「ええ、本当に美しいですね」と私も口をあわせました。

そして、主人はその日から亡くなる前まで、毎朝のように葉を通して入る光をながめるようになり、た。主人が亡くなりましたとき、自分の父親のように慕っていた美術評論家の福島繁太郎さんからいただいた、庭のミモザの花が真っ黄色に咲いていました。私たちはサン・ジュアンの根元を掘り、落ちていたミモザの花びらを集めて穴にしきつめて、主人の灰を入れて埋めました。そしてそこに主人が使っていたお茶碗も供えました。

本当に主人は庭にいて、私たちを見守ってくれているのでしょうか。私は主人とそんな話をしていました。ときは、ほんの冗談くらいに思っていました。ですから、こんなにも早く亡くなるとは夢にも思っていなかったのです。

※香月婦美子「天の右手」(求龍堂より)



ミモザと香月画伯



サーカスの人形

絵画、またダ・ウインチなどによるルネサンス期のモノクロに近い絵画に出会います。中世の彫刻にある陰影の強い顔は、ヘンペリヤ・シリーズの独特の「顔」の表現を生み出すきっかけになりました。また、ルネサンス期の巨匠にも、自身が目指すような色数の少ない作品があることを知り、黒色と褐色を基調とした様式への確信を深めます。学生時代から日本人である自分が西洋の技法の油彩で描くことの意義を考え続けていた画伯にとって、西洋画と東洋画を融合させたようなこの様式は、自らの追求する表現に適したものでした。収穫の多かったこのヨーロッパ遊学後、画伯は本格的にヘンペリヤ・

シリーズに取り組みます。1960年(昭和35年)には大津高等学校を退職し、画業に専念しました。その後も次々と作品を発表し、国内外で個展を開くなど活躍します。油彩や水彩スケッチ、版画などの平面作品のほか、深川湯本三の瀨の窯元に向いて萩焼へ絵付けをしたり、仕事の合間には廃材を用いて「おもちゃ」と呼ばれる彫刻作品を作ることもありました。この「おもちゃ」作りを画伯は「余技」と称していましたが、サーカスの人形や動物たちなど、画伯の遊び心のあふれたたいへん楽しい造形群です。

また昭和40年代後半に入ると、たびたび海外への取材旅行へ出かけます。夫人同伴での訪問先は、2度訪れたタヒチのほか、ギリシャ、モロッコ、スペインや、セイシエル諸島などのインド洋の島々など、暖かい地域が主でした。

その他にも孫や子どもたち、身近な草花や生きものを題材とした油彩小品など、数多くの作品を発表していた香月画伯ですが、1974年(昭和49年)3月8日、心筋梗塞で自宅にて亡くなりました。アトリエには、最期まで描き続けられていたヘンペリヤ・シリーズの「月の出」「日の出」「渚(ナホトカ)」などが遺されて

国体プレ企画展 山口探訪・名勝、旧跡を描く
開催中～3月27日(火曜日休館)

1963年(昭和38年)朝日新聞に掲載された『新国記・山口編』のカット絵として描かれた、県内各地の風景画等を紹介します。長門市ゆかりの作品や、香月画伯デザインの山口国体(昭和38年)参加章も展示します。(2月2日から一部作品を入れ替えます)

▲捕鯨古図(長門市)
▲南条踊(長門市)

いました。62年の生涯でした。香月画伯は、一時期を除く生涯のほとんどを、「私の地球」と呼んだふるさと三隅で過ごしています。従軍と抑留を経て、大切な家族と共に過ごし絵を描くことのできる喜びを感じ、常に「一瞬一生」(※下写真)の境地で制作に取り組んだのです。

晩年、雑誌の連載で「生きること、私には絵を描くことではない」。それしか自分に納得できる生き方はない」と記しています。生涯描き続けた多くの作品ひとつひとつに、画伯の生き様そのものが刻み込まれていると言えるでしょう。

「一瞬に一生をかけた
こともある。
一生が一瞬に思える
時があるだろう。」
y.k. 2014

「一瞬一生」についての画伯直筆の解説